

信濃奇談

上

ル 4
4643
1



門
號 4643
卷 1



濃奇談序

予為家人時東走西奔專從
事醫業以糊口妻孥傍墜
好文藝乎不得暇隙每以為
憾兒名鏗在膝下以鑽吾志
述吾子於是吾業有達

早稻田大學圖書館
昭 35. 7. 13 藏
藏書

也善我信濃之地里老所傳
鄙從奇談頗有類齊東野
語者予徵諸史書一一為之
從之錄隨而錄之名曰從濃
奇談茲己丑二月元鑑沒何
如遺篋中得之是雖予之所撰

書皆元鑑与旨有力可見余之所
小言隻語必述而不遺可謂其
能勤為子之道人也逝矣悲哉予
而不意其志傳之世以慰其魂耳

文政己丑仲夏 中邨元恒撰



樂れおとさるゆや沙汰せりいせめつらりぬ事と
いひ傳へるゝ家白紙物語り是を西土り鼓妖や
さし事乃らりしももぬらんあし評せりたふり
あゝ香かの蜜蜂のむらりりつるも或るむらり
とひくゝんくさゝとておろとをさふそらもんを
時りもゝ蜜蜂あはるるとさるはゝも音樂ある
いひたせあふ樂

鹽井

鹿鹽とらふ山里りおほきぬ家岩の下らり鹽水
のさるゝとさる家ありり里人たふらぬく食料

わさきと白紙物語いひむら鹿事りてけ岩のゝとて
所たりたをさるぬらり塩水湧出ぬたはく鹿
鹽村となん多村とふとぬらりぬ河をぬ塩水
ぬれをさる河鹽やぬらり城塩と鹿塩と改く所舎
の説なせりある下甲斐の國巨摩郡ぬ塩水
ぬらりありぬらり甲斐名勝志ぬらりぬらり入
谷山中ぬ塩水のぬらりぬらり石川氏語りぬ
皆この鹿鹽山乃塩水ありぬらり蜀り鹽井と
本州ぬらりぬらり井鹽山鹽池鹽木鹽石鹽ぬらり事
瑯琊代醉篇りぬらりぬらり所謂鹽井なるあり

はつたやも五雜俎小蜀の鹽井と物とをて投まわ
鹽とをまわるとりおぬて同しおき

狐の玉

我藩士小岡田の事ありてあり秋の末の網も
てと峯川のきうとありまあるよ白き狐乃あこりて
右小左よ飛く致をななくあめひあく網打
をけまらわやちまのりて逃失せぬはとるれを
老何あまあり拾ひぬく見れは白き毛もて作る
やうの玉わう今もあの家りむるあぬ五雜俎
小く蜘蛛蜈蚣蛇乃影ゆもああゆるとりて

吉田氏ゆも狐の玉あ

りそのまのゆーやう

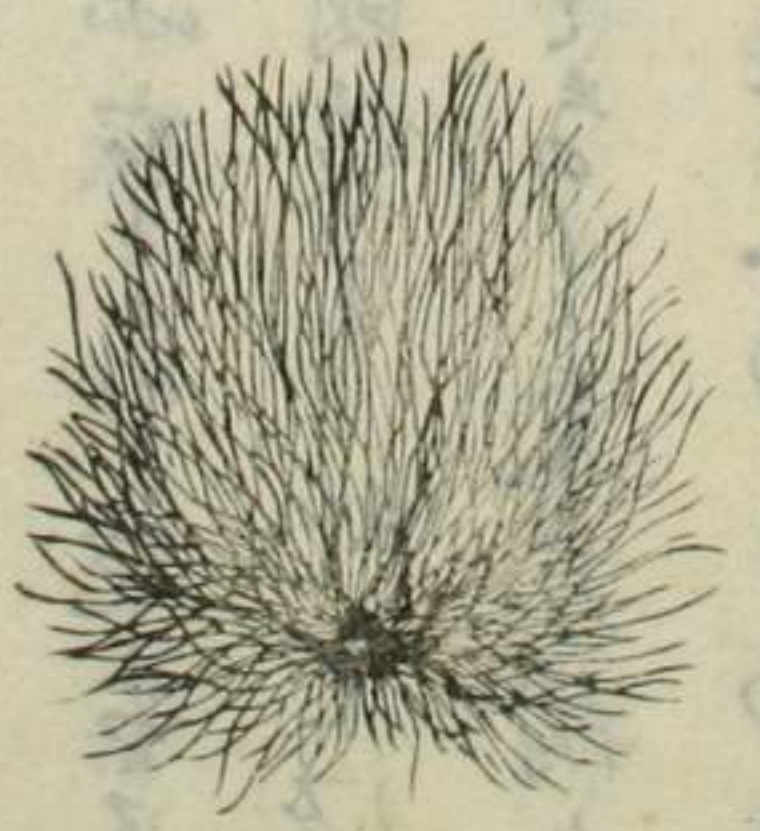
る吉田氏を同し程作

明もり見し影まあゆ

ありゆまぬ

蛇足

小町谷とりの里乃りあ家り夜半のはひひ樹乃
鶏おどろくしを鳴りあり驚きこんてまれの
ふとやあ家蛇ふり樹より来りて鶏を巻とる
ゆきああ後とて打殺しつ串よきさ



て火をく焼たらしむれを豆出くたりあやう
初を縁しむあはれ大路小捨をそ人もゆき縁
んせたりいひあやうた事といひあはれり家陶
隠居り本州注り蛇皆足あり地を焼て熱せしめ
酒をそ汚ひくその中ふむい豆出りまて西陽雜
俎りも蛇は桑葉をく焼て足むりといひんえきり
蛇の足出り人常乃るまらんふむい蛇を足な
きものといひ思ふ家あり戦國策り蛇とほり
く足と画を兵用のきくゆきあり東方朔り守
宮と封くまは蛇蛇やまて是は足ありといひ

の蛇皆蛇みらまはな記のめとゆきありあはれ古の人
まはりわくありい今の人と縁するふまはれ

鶴 附鶴

文化の法本下れきり小玉鶴のつねありく可あ
目う海とまらつすいしめりくかなるしりやまはれあり
人もあり記る者りあり縁しむ墨老のゆきあり
乞よりと十進前より鶴二羽今のいひあり居る
よあはれ人縁絶をそそのつねと打殺せり世の人妻
子あはれ打法をいひ絶えきも縁するといひ海
年回よあはれ絶く縁するたあをいひあり

あまのり先享和は法計子業材のあ中たるの止
まのちのふ是もつて鉄炮とて打たぬたきすは
鳥のちを凡よ水のちを河のわ名と知れぬ人あ
らけりし我先人法高をいひてををんたわ九則
みく野鳥のちをふく詩經よ鶴とて言たるを
乞ぬるといひ果て然たりしうあまのちを
山谷と鐵く一冊の相とてあるとて持たれ
昔天子 ひはり
近き法松本よ昔天子とてあり伊勢國にて
おのこは山札乃ありとて天山崩乃彦

城日記小頼朝卿乃故て金の札跡とて鶴と持
たぬとていふ由彼の數百年とて長生一是と
うは小鳥乃數十里を越く花のちをいふとて
~~~~~  
蝦蟇  
二日町村のちと蝦蟇は蟬鼠とて出り埋みあふ  
り忽よ小虫のちを尺あるり隔く口成  
開く吸こみあふとて人けりて白紙物  
語小小平村乃他人分亭のちを蝦蟇のちとて  
の猫取たるのちを荒井のちをいふとて

ちの邊の猪  
 鹿山中と  
 蝦蟇乃其  
 のこゝに  
 任り由き  
 は星の内  
 長あきと  
 足て毒  
 氣少あ  
 きたあ  
 やまは  
 えくく  
 地病と  
 ねんあ  
 地の箸笠  
 のけん  
 箸ハく  
 さぬり

かの蝦蟇乃目川ありてくまのけしふたなる  
 はなをいもくおれを蚊蜂をせやうはふのいんも  
 かく花あうてけし入るるあやう見えきう蝦蟇  
 け老るふ種々小あふれ事とをいふやや蝦  
 蟇の箸笠のこもこのあきのほり白氣出るる中霏  
 雲録 小の甲や瑯琊代醉篇よむり

狐

ひい法を乃法もや坂井の里り浦野氏けり男  
 あうと妻とむい一人とて母海乳くを  
 轉けふにけし子あきおて母さうけり尻尾をえ

毎さう  
 地り  
 とい

たあくやまのけりこいあわをあの母けり  
 きんりあぬる事おゆや思ひんとい  
 地くもりけりあきくはあのをたけり  
 う田地小悉福まうさうは母のけりふ山や  
 あん殊りもやうる実のうく獲とのあ  
 しくあさう今この子孫まをいふは皆乳  
 のりけり乳の形けり幾人ともく必その志は  
 もらや小笠原歴代記り長時の妻も浦野彈  
 正正忠う娘なや狐の人小けりく産あやあり  
 けけりは浦野氏あけの正忠う子孫をうとけ

いづれの地にも

鎌鼬

人忽尔地は踏れりまひつゝまゝいづれををり人  
ま刀をく切るるにまゝ痕はくを俗小の魔物  
まうく人へ觸るぬりぬりまゝの毒と鎌鼬と  
まんまあ中まゝ痛もそのゆりまゝ東涯の盡  
簪鼓まゝ信州のまゝまゝの信州のまゝ  
限りまゝの信州のまゝまゝの信州のまゝ  
まは關東のまゝまゝの信州のまゝ  
まは關東のまゝまゝの信州のまゝ  
まは關東のまゝまゝの信州のまゝ

刀を持ていりまゝのまゝまゝの信州のまゝ  
まは關東のまゝまゝの信州のまゝ  
まは關東のまゝまゝの信州のまゝ  
まは關東のまゝまゝの信州のまゝ  
まは關東のまゝまゝの信州のまゝ

二足鶏

大泉村乃ある家ゆく二足の鶏とせし  
の鵜耕地まゝ二足の鶏おまゝ四足乃鶏の  
まゝまゝの信州のまゝまゝの信州のまゝ  
まは關東のまゝまゝの信州のまゝ  
まは關東のまゝまゝの信州のまゝ

馬角

芝尾村のある家より馬角なりとて此物なるの享  
保の心その家にて飼け家馬二年うらるる毎に脱  
てるまこと生ぬれを燕乃太子丹が秦子質た  
りし時馬角と生せし國小還さんといひし世  
あつたときん物成りありはれは西漢文帝十  
二年成帝綏和二年おし晋武帝大康元年馬  
乃角と生せし事彼史に見ゆ本邦ありし馬  
角も珍宝なり身延山等にもありとて身延鑑  
ありし呂氏春秋より人君失道馬生角より京房

易傳の臣易

上政不順馬生

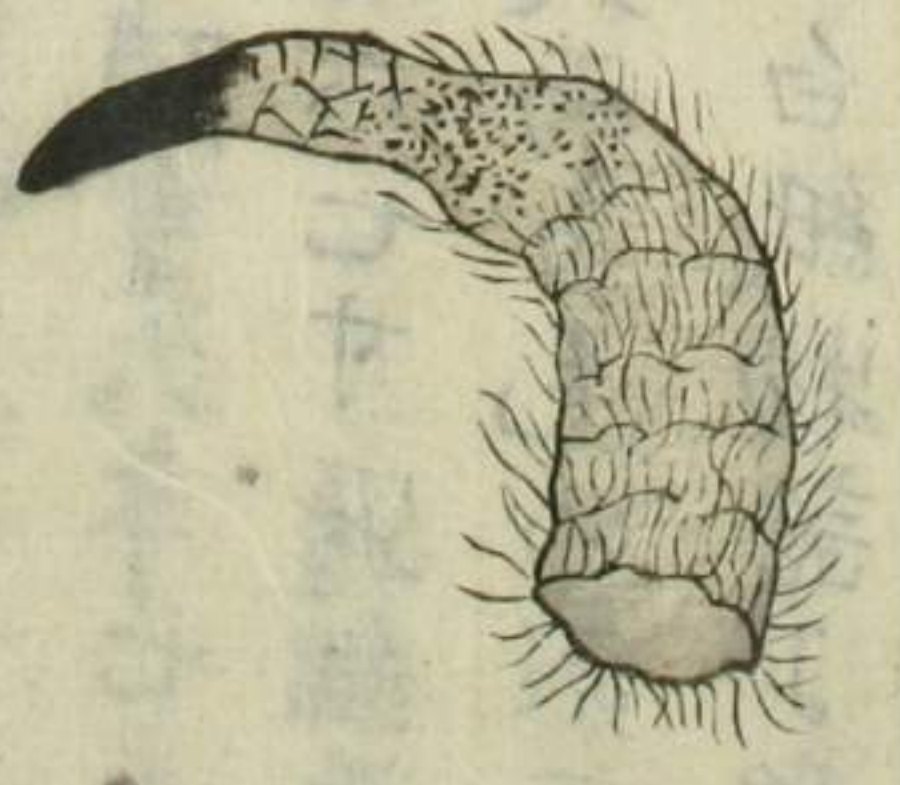
角とんをを

く禎祥のもの

みらあ

寛永年中武州江戸小駿馬あり耳のわに角と生  
寸長二寸余あり阿部對馬守重次は馬角一雙を  
日光山 東照太神宮の齋庫に進呈すて統羅山  
文集よりんえり漢語故事あり

降毛



文化乙亥の八月朔日俄しを吐き曇り雷電なり  
後り大雨降をきけ家垣よりぬれ白き毛木乃  
枝庭の垣をよぶ葉らやかくたれくあり滋野郡  
少てき七月二十七日毛踏りしやわり西土にも  
けりたもくはりく正史も載せぬ漢書武帝天  
漢元年二月天雨白毛二年雨白毛釐ハ毛の強  
直物たる晋書武  
帝泰始八年五月蜀地雨白毛隋書開皇六年七月  
京師雨毛如髮尾長者三尺余短者六七寸通鑑天  
順帝至正十八年五月山東地震天雨白毛の類西  
川氏の怪異辨談も傳ふる也さく白紙物語も載

文化丑の十月廿二日未の刻あり武及多摩郡  
ありあけりすのち乃とてむきしりしけり  
そと響骨やうく細くなりそゆもぬ八王子乃子安  
宿の民忠をとりよとの他は家田と野原もつた  
取乃麦の中にあやうたりの落地やまもく白き  
しきさうくのちきり里人山中美よりそてりぬれ  
田の中四尺をもりむらむらむらりしきりしてこれ  
きし居る田のあつたりり相ちたりたり  
長三尺たまり  
厚廿五六寸たまり  
村をきりしはひりもくおちやけははみえあけ  
とあんねいりお物天子ありしと形阿さ次

しと地亦落れ形を雨露霜雪ハ乃  
亦也亦終人々あ申とも廿月時め石も  
毛ももなれり地亦感しと地亦感しと  
了大重ふ石や毛の何あへきものな信人を  
この山ももろ抜出きり石あやまるとねわ石紙  
はたもいふもまきと毛をなふらいつん石乃  
落しるも春地種より世々の史傳おをえとん  
えきうあ申むまはる世中々電の降れあも  
いりまの山の水乃凡しく吹初せあありやいふ  
笑あり堪たり鞍耕録小至正丙午八月辛酉上

海縣子落ふ石あり尾なり首すく尺不盈

浮巖

赤須村乃東のて徳川中ふたを石あり其の頂  
まあしく水面よりうきまはるはほの流あふ  
ても者のいしと申やふのふんゆふと土人浮  
巖しと名付く水も流く浮況をいしと申あ  
ゆもいしと申りたる五雜俎及び瑯琊代醉篇ふ  
地肺浮玉といふものあふたのいしと申あ  
いしと申りたるもあふりのもや海内奇觀に  
浮山在安慶府城縣東九十里といふえたるもの

その形は

鸚鵡石

大州小鸚鵡石あり人主傍しく笑詔を終へるを  
らばそのくく小鷹せり中尾村にも木塊石と名  
付る家地有りくもとを聲相應せり伊勢に  
も多村遊音り 鸚鵡石あり東涯翁の遊勢志に  
見くくり唐鄭常ら洽聞記に響石とてふあり  
まこくおおし又按らばり雲林石譜に云く  
鸚鵡石もその形に似るを云く名付るといふ  
小蓋簪鉢と出たり此は志摩也とて乃應

まふ所ありく 新鸚鵡石と名のもたれり田國  
筆土産ふらん

いはふ

伊勢郡の人或曰木曾のくく萱平とて云く  
海りまふす竹くく生ひ後木曾川  
の流とたけりまふの葉枝ありいはふとて  
魚小化らら其人おきて持留るなりいはふ  
らつねおしあはれそく家よりくく扱  
あも持来りいはふとて鱒魚の形とて山  
まふありとてまふ乃く情とてまふのや

陳麥の蝶とて有り 稲米乃蠹と有り 暑蕪の鰻鯉  
 と有り 腐竹乃蛋と有り 爛灰の蛇と有り 彰を  
 ありて 友人安田氏栗枝を垣く月ひきまおう土  
 あれとて 水虫小化  
 したるとて かんざり

山蓼いれ 藤の  
 てありとも 時  
 石龍子に 竹の  
 う者 竹の  
 瓜の 勇と 竹の  
 列子 中も 又

河童



羽場村より 天正の頃 河童の噂 人伝はあはれ

馬と河童の噂 天正の頃 河童の噂 人伝はあはれ  
 河童の噂 自由の頃 河童の噂 人伝はあはれ  
 河童の噂 自由の頃 河童の噂 人伝はあはれ  
 河童の噂 自由の頃 河童の噂 人伝はあはれ  
 河童の噂 自由の頃 河童の噂 人伝はあはれ  
 河童の噂 自由の頃 河童の噂 人伝はあはれ  
 河童の噂 自由の頃 河童の噂 人伝はあはれ  
 河童の噂 自由の頃 河童の噂 人伝はあはれ  
 河童の噂 自由の頃 河童の噂 人伝はあはれ  
 河童の噂 自由の頃 河童の噂 人伝はあはれ



小八たけのねひりたてく強り馬は走り部々たけの  
家くちしりまふふに童多獲とてく事も少く  
とひたふふやうふいふはねく事なれども人々  
とくくあつて希有の事なりと集ひ  
よてきひく志をうけしるに極ふ  
る事ありしに仁心ありてやく事なれども  
とけしうふあそびを縄解く事なれども  
海その身をを報せんや川魚をくねて戸口ぬれ  
けし事なれども小平物語りにもあり  
今も松里老の語りてはよも河童乃小兒

そと取々ありて多ありに河童やひきつてかめを  
かきよひつては月つきの時あり木州溪鬼共乃附結  
ふ水虎といふおらばたきひめやと貝原公羽とり  
新しよも水獺のむきもれどもや貝原翁又  
し淮南子に魍魎状如之歳小兒赤黒色赤目長  
耳美鬚左傳注疏に魍魎の川澤乃神ありやんん  
まらあめの河童より似たり云

信濃奇談巻之上終

1711

67969

1711  
 1712  
 1713  
 1714  
 1715  
 1716  
 1717  
 1718  
 1719  
 1720  
 1721  
 1722  
 1723  
 1724  
 1725  
 1726  
 1727  
 1728  
 1729  
 1730  
 1731  
 1732  
 1733  
 1734  
 1735  
 1736  
 1737  
 1738  
 1739  
 1740  
 1741  
 1742  
 1743  
 1744  
 1745  
 1746  
 1747  
 1748  
 1749  
 1750  
 1751  
 1752  
 1753  
 1754  
 1755  
 1756  
 1757  
 1758  
 1759  
 1760  
 1761  
 1762  
 1763  
 1764  
 1765  
 1766  
 1767  
 1768  
 1769  
 1770  
 1771  
 1772  
 1773  
 1774  
 1775  
 1776  
 1777  
 1778  
 1779  
 1780  
 1781  
 1782  
 1783  
 1784  
 1785  
 1786  
 1787  
 1788  
 1789  
 1790  
 1791  
 1792  
 1793  
 1794  
 1795  
 1796  
 1797  
 1798  
 1799  
 1800

1711

